

課題別国内ワークショップ（学習会）

「第3回地球時代のヒント・農村未来塾」の報告

2009年2月27日（金）から3月1日（日）にかけての3日間、長野県松本市奈川地区寄合渡（よりあいど）にて、「第3回地球時代のヒント・農村未来塾」を開催しました。

21名の参加者と寄合渡集落の皆さんと一緒に作り上げた学習会となりました。

学習会の概要～ワークショップの案内より抜粋

<学習会の趣旨>

NGOとは、地域で育まれてきた資源を活かして地域が自立して生きていくためにどうしたらよいかを、地域の人々と一緒に考え、地域の人々を手助けする者ではないでしょうか。さらには、地域の人々と共に学び合い、お互いを通して自分たちが持つ資源に気づくことで、開発途上国で活動する私たち自身も、日本の地域が育む資源や課題に向き直すことにつながります。

本学習会は、日本の農山村での聞き書き学習を通じて、開発途上国の農村で活動するNGOスタッフを養成するものです。地域の資源に目を向け、地域の人々の声を聞き、それらに学ぶことは、開発途上国で活動する際に欠けてはならない姿勢です。また、日本の農山村の暮らしから見える私たちの国が持つ資源や抱える課題は、開発途上国で現地の人々と話をする際の“共通語”となるでしょう。加えて、一緒に学習会を作り上げる他の参加者との交流が、参加者各人にとって将来も持続するネットワークの1つになることを期待しています。

本学習会は、2006年度から年1回実施しており、今回で3回目の開催となります。2006年度は栃木県茂木町、2007年度は静岡県川根本町で開催され、地元の人々、地域を取り巻く人々の協力を得て実施されてきました。3回目となる今回は、長野県松本市奈川地区（旧奈川村）で開催します。

奈川地区は、野麦峠に至る雪深い地域です。参加者は、奈川地区を流れる境川と奈川の交わる地点、寄合渡（よりあいど）集落を中心に、注意深く地域を観察し、人々の声を聞き、地域の資源、課題を見つけることができるでしょう。そして、発見した地域の資源、課題を土台に、地域の人々と一緒に議論することになります。地域の人々と共に学習会を作り上げることが、本学習会の特色です。参加する側だけでなく開催地にとっても有意義な学習会となることを目指します。

<目的>

- (1) 日本の山村に在る資源、抱える課題を見つけ、地元の人々と議論することを通じて、海外でのボランティア活動を行うための知識・技術を習得する。
- (2) 「参加型開発」とは何かを考え、地域の人々との円滑なコミュニケーション能力の向上を図る。

<主催> 社団法人 国際農林業協働協会／寄合渡元気ハツラツ研究所

<プログラム>

日にち	時間	内容	講師・挨拶者
2/27(金)	11:00	集合・受付	
	11:10	バス出発：借上バスにて寄合渡へ 車中にて自己紹介 昼食（各自持参） 車中プログラム 講義：農業改良普及員の仕事紹介－ 農業改良普及事業の役割を考える	長野県松本農業改良普及センター 地域係 技師 松崎あけ美氏
	12:30	開会式 挨拶：(社) 国際農林業協働協会 松本市役所総務部奈川支所	<於・公会堂> 副会長 芳田誠一氏 支所長 水橋文雄氏
	13:15	講義：寄合渡を知る *寄合渡と元気ハツラツ研究所 *集落の見学 等	寄合渡元気ハツラツ研究所 代表 菅原奈実恵氏
	14:30	講義：「寄合渡にぎわい！未来予想図 プロジェクト」	松本市役所奈川支所地域課 建設農林担当主査 桜井正志氏
	15:30	わらじ作り体験	奥原寛和氏、奥原悦太郎氏 奥原庄太郎氏、古幡守一氏 ほか
	18:00	振り返り・翌日の確認 チーム毎に打合せと班分け	
	19:00	旅館へ移動後、夕食 参加者同士で交流	<於・各旅館>
2/28(土)	08:00	公会堂集合 本日のプログラム確認	<於・公会堂>
	08:15	講義：地域開発を考える	松本大学総合経営学部 観光ホスピタリティ学科白戸洋教授
	09:00	チーム毎に打合せ	
	10:00	聞き書き学習 午前の部	集落をまわる 弁当持参（花豆の会が調理）
	12:00	聞き書き学習 午後の部	午後訪問のお宅で一緒に昼食

	14:15	公会堂集合 メモ整理 チーム内・チーム同士で情報交換	<p><於・公会堂></p> <p>名古屋大学大学院国際開発研究科 教授 西川芳昭氏</p>
	16:15	講義：参加型農村地域開発を考える ー途上国と日本を結ぶ視点ー	
	17:00	奈川ソバ(とうじそば)で集落の人々と交流会	
	19:30	発表準備開始	
	23:00	各旅館へ(公会堂閉館時刻 23:30)	
3/1(日)	08:00	公会堂集合 本日のプログラム確認 チーム毎に発表内容確認・最終調整	<p><於・公会堂></p> <p>(花豆の会が調理)</p>
	09:00	公開発表会 全体質疑応答 講評	
	11:10	閉会式(修了証授与)	
	11:30	昼食(弁当)	
	12:15	WSの振り返り	
	12:30	後片付け	
	13:00	バス出発、松本駅へ	
	14:30	松本駅にて解散	

学習会の報告

集落の人と一緒に作るイベントですので、ワークショップは「学習会」、ファシリテーターは「助言係り」と呼ぶことにしました。3日間という短い学習会でしたが、集落の方と食事をする機会があり、一緒に手作業をする機会があり、様々なことが詰まった時間になりました。一連のプログラムの様子を報告します。

1) 2月27日

(1) 松本駅からの車中にて

1分以内として全員が自己紹介した後、長野県農業改良普及センター改良普及員 松崎氏の講義。

* 松崎氏 講義

車中であつたためテキストなどは使わず、松崎氏の仕事を紹介していただく中で、松本周辺の農業、特に山間部が抱える課題、普及員の仕事の実態などについて伺った。

松本市では、水田の生産調整は4割となっており、ほぼ2年に1度しか作付けできない計算になる。採算の合うコメ販売額は、15,000～16,000円/俵であるが、実際の販売額は12,000円～13,000円/俵程度。農家への経営指導の一つとして、農家の時給を割り出すよう指導しているが、若手農家から「今年は計算したら時給200円いかない」と言われた。長野県の最低賃金は680円。肥料価格の高騰などの影響もあり、非常に厳しい。「地産地消」というが、いくら「安全・安心」を消費者が求めても、肝心の「産」である、地域で生産する力はもう維持できないのではないか。

平坦な恵まれたところでも厳しい。中山間地は更に厳しい状況にある。1反歩の水田を維持するために、傾斜地では1反歩の畦を管理しなければならない。山が荒れるに伴い鳥獣害も深刻化している。市内でも、周辺の山間地から荒れていく。

高齢の農家は農地にこだわりを持ち、先祖伝来の農地を守ろうという意識が強い。しかし、若い世代は経営を考えて農業を見る。農地の維持にはこだわらず、経営が成り立たないと判断すれば、農業を辞めるだろう。高齢化が進めば、農業はどうなるだろうかという思いがある。

普及員は、農家と一緒に悩むのが一番の仕事だと思う。経営指導と言って時給計算をさせたら、不幸を発見させただけだったという面もある。自分の両親も、普及員にただ聞いてもらって頷いてもらうだけで嬉しそうだった。

参加者の皆さんには、学習会が終わってもこのまま松本に残って、ここで力を発揮して欲しいとも思う。あるいは、海外で経験を積んだら、また長野へ来て、長野のために仕事をしてもらえたら嬉しい。

(2) 開会式

開会式では、当協会芳田副会長の挨拶の後、松本市役所奈川支所長 水橋文雄氏から挨拶。

* 水橋支所長 挨拶

117km²に1000人弱が暮らす。



奈川の人達の収入は、公共事業・建設関係が4割、スキー・観光業が5割、農業が1割と
いったところ。

平成17年に松本市と合併した。旧奈川村のころから、人口流出を防ぐことを目的に、結婚、
出産に助成金を出したり、通勤助成を出したりしてきた。合併後、松本市もそれを引き継い
でいる。

(3) 講義

* 寄合渡元気ハツラツ研究所代表 菅原奈実恵氏

奈川の自然の中で育ち、奈川の自然が好きで、自分の子供もこの
環境で育てたいと思っていた。結婚するなら、奈川以外の人で、奈
川と一緒に帰ってきてくれる人と、と思っていた。1人でも奈川の
人口を増やしたかった。夫は大阪の人。



奈実恵さん

奈川を外の人に知ってもらいたい。奈川に来た人には、「奈川」と
いう名前を自分のところに持って帰ってもらいたい。

何かできないかと思っているときに、父親がやっていた「養蜂」を知った。日本ミツバチ
の養蜂で、面白い。父親は可愛いから飼っているだけ、と言うが、これだと思った。奈川に
は日本蜂振興組合がある。入山、寄合渡などを中心に奈川各地で日本蜂の養蜂が行われてい
る。西洋ミツバチが入ると、蜂蜜を奪うために日本ミツバチの巣を襲い、巣を壊してしまう。
そのため、西洋ミツバチを入れず、日本ミツバチを保護している。組合の人達は販売などに
は熱心ではなかったが、なんとか販路を開拓し、取材なども来るようになった。しかし一方
で、特産化するには、量が少ないのが課題。

その他にも、寄合渡の水源池でカヌー教室を開いたりするなど、試みを重ねている。

菅原氏の講義の後、寄合渡集落を見学。小雨（雪）の降る中、1時間ほど外を歩いた。

* 松本市役所奈川支所 地域課 建設農林担当主査 桜井正志氏

農業高校、農業大学校を卒業、地域活性化センターの地域リーダー養成塾にも通った。週
末は、モモ、ナシ、リンゴ、水田を経営する農家で、日曜日から土曜
日まで毎日農業のことを考えている。



桜井主査

平成17年4月に奈川へ異動になった。合併に伴い、役場にいた普
及員が本所に引き上げとなり、農業のことが分かる人間ということで、
自分が来た。

「下」（平坦地）の農業は「売れるものを沢山作って売る」農業。
でも、奈川は、農業で100万円以上稼ぐ農家、専業農家はゼロ。農地

を守る程度。村の最大の問題は、人口流出。仕事・就業機会
が少ない。「15の春」という問題もある。奈川には高校がない
ため、高校から下宿する。そこが第二の故郷になり、そこ
で仕事を見つけ、最後には親を呼び寄せていく。

すぐそばには上高地という観光地がある。上高地と奈川と
の分かれ目となるトンネルで、10台くらい一緒に並んでい



た車のうち、奈川の方へ曲がったのが自分の車だけで、あとは皆、上高地側へ行くのを見たとき、「奈川に人が来るようにすること、奈川に人を呼び込むこと」が自分の仕事だと思った。

この辺りで奈川と言えば、「奈川ソバ」。ソバが有名だから、ソバを伸ばす。ただ、ソバは10aで100kg。1kg700円で売れても10aで7万円。本当にそんな農業でいいのか、という気持ちはあった。でも、やるしかない。

ソバの県内生産量を考えたら、こんなに信州ソバと銘打つソバがあるわけがない。つまり、多くのソバは信州ソバ以外のソバをたくさん使っているのに、信州ソバと言っているということ。そんな状況だからこそ、奈川のソバ屋だけは嘘をついちゃいけない、奈川のソバ屋は奈川ソバだけを使う、ということにした。それには量が必要になる。標高1000mを越えると、それだけで味は良いが、収量は落ちる。ソバ振興組合を作って、住民総参加でやることにした。高齢化で作業が出来なくなったとき、組合が作業を請け負う体制を作った。

合併前は17haだった作付面積が、現在は43haまで増えてきた。新聞などのメディアの取材が、平成17年は5回、平成20年は19回あった。新聞に活動が掲載されることで、人々も自分たちの取り組みの意味を納得でき、やる気も出る。

課題は4つ。①昔の品種を復活させたい。②ブランド力を高める、商標登録する。③役場からのハンドオーバー。担当がいなくなったとき、地元でやっていくか。④奈川で作って奈川で食べてもらう。そのためには、石臼挽き・ロール挽きでの製粉が必要。

元気づくり支援金事業が県にあった。ソフト事業は100%、ハードは2/3が補助される。新しい製粉機導入にそれを活用しようと考えた。ただ、製粉機が欲しいといっても許可は下りない。仕掛けが必要だった。寄合渡では、70~80代のじじ達（長老のことを、地元では「じじ」「ばば」という）の力が強い。だったら、これまでなかなか集まる機会のなかった30~40代の人々を中心に何かやろうと思った。そのため、組織＝寄合渡元気ハツラツ研究所を作って、農村と都市の交流や産官学協働として企画した。450万円の事業のうち、県が260万円、残りを地元町会が負担した。

仕掛け人として失敗したと感じるのは、最初から「製粉機が欲しいから協力して欲しい」としたこと。そのため、マップ作りや交流会には今ひとつ力が入らなかった。また、メンバーは、公募ではなかった。今でも、集落の中では、一部の仲間内だけが何かやっている話、という声がある。一方で、「やっとな若い世代が集まるきっかけが出来た」という評価もある。折角やってきたことを続けたい。けれども、手弁当では長続きしない。研究所のメンバーの間でも、温度差がある。

これまで、じじ、ばばの協力も得ながらやってきた。これからも若い世代とじじ・ばばの世代を結び付けるようなものをやりたい。じじ・ばばのやってきたことを若い世代が引き継いでいくことができればと思う。

今回の学習会では、即効性のある新しいアイデアが出ることを期待している。継続する取り組みにつながることを期待する。

(4) わらじ作り

指導役4人のじじ達から、ざっと説明を受けた後、数人ずつのグループになって、縄ない、わらじ作りを行った。また、奈川支所の南治一氏から、午前中に、指導役の皆さんが集まって、藁を



これで藁を打つ



まず縄ないが難しい

水に浸し、叩いて、軟らかくする準備をしたこと、そうした準備があって初めて縄をなうことが出来ることが紹介された。

参加者は、縄をなう難しさを実感し、毎日何足もわらじを作っていた昔の生活に思いをはせたようだった。また、指導役の皆さんとうち解けることができ、聞き書き学習の良い下地となった。

(5) 振り返り

助言係である杉本正次氏に進行をお願いした。

最初に、体を動かし、緊張をほぐした。杉本氏の言葉に従って両手を大きく動かし、笑い声も出ていた。杉本氏からは、国内外を問わず、このような状況で場をほぐす手法を身につけておく大切さ、何も道具を使わずにそれができると、その一つとして今回実践するのだということについて説明があった。



体をほぐす

その後、①奈川に来て驚いたこと、②奈川で苦労したこと（4回以上訪問している人への質問）、③今日一日で印象に残ったことについて、参加者の声を聞いた。

- ① 奈川に来て驚いたこと：参加者からは「薪」「熊が出ること」「わらじ作りと先生の手さばき」「松崎氏の話、農家の時給が200円ということ」といった意見が出された。
- ② 苦労したこと：名古屋大学が協働で行ったマップ作りの過程で、「写真を撮るのは楽しかったが、それを絞り込んでいくことに苦労を感じた。どんな基準で選ぶかが難しかった」との意見だった。
- ③ 印象に残ったこと：「魚道を確保して河川工事をしたということだったのに、実際は魚が登ってこられないと聞いたこと」「散策の時、ハツラツ研の人の説明ぶりが、常に『これがこの良いところ』というニュアンスであったこと」「止まったままの時計を見て『時間がゆっくり流れている』と肯定的に説明があったこと」「来る前のイメージと違う。土地が狭い。畑もとても小さい。厳しさを感じた」－（杉本氏より「驚きをきっかけに“厳しさ”を違う角度で捉えてみることも大事」とのコメントがあった。）「菅原氏の『便利すぎると本能が薄れる』という言葉。わらじ作りも以前は皆が出来たはず。薪も労力がある。今は、スイッチ一つで暖房が確保でき、お金があれば靴も買える。ただ、それはとても便利で、高齢化を考えると薪などの労働は厳しいかもしれない」

(6) チームワーク（チーム分け；プログラム p.8）

振り返りの後、A～Dの各チームに分かれて、リーダーと参加する聞き書き班を決めた。その後、聞き書き班毎に集まり顔合わせをして、解散した。



Aチーム



Bチーム



Cチーム



Dチーム

(7) 旅館でのチーム内交流

夕食の後、チーム内で自己紹介や情報交換など、交流を行った。

民宿四季に宿泊したDチームは、事前ホームワークの記述を基に自己紹介を行い、お互いの関心事項を確認した。チームメンバーの関心事項を共有することで、自らの興味対象を広げたり、新しい角度で物事を捉えたりすることが出来たようであった。

その後、実際に来てみてどうだったか、という観点で、意見交換を行っていた。

出された意見や疑問点は次のようなもの；

- ・ 地方交付税の重要性に関心
- ・ 農業がうまくいっていないなら、その理由は？水田はどこにあったらうか。コメの生産量は減っているが、野菜の生産量は変化がなかったように記憶している。農業についてもっと知りたい。
- ・ 商店を中心に物の流れや人の関係を見たい。お客さんは誰なのか。
- ・ 寄合渡に3軒も旅館があるが、旅館のお客さんはどんな人か。
- ・ 獅子舞に観光客はほとんどいない。何故？

2) 2月28日

(1) 講義 (松本大学総合経営学部観光ホスピタリティ学科 白戸洋教授)

以前は、生きていくために共同体や共同作業が必要だった。それが、村の外で金が稼げるようになったことで、以前は共同作業に頼っていたものが自分で金を払って出来るようになった。その結果、共同体は必要なくなった。共同体は「壊れた」わけではなく、誰も必要としなくなったのだ。



白戸教授

そのため、昔に戻ってもしょうがない。今は共同体をもう一度構築する時。「自治」とは、嫌な人、考えの違う人と一緒に生きていくことだと思うべき。

地域のために夜眠れない人はいない。人間は困らないとやらない。つまり、やらないということは困っていないということ。ただ、困っているのに気づかないことはある。潜在的に困っていることを顕在化するの

に、よそ者の目、外からの目が役立つ。

人間の行動は、2つの理由から起こる。「面白い」か「儲かる」か。「儲かる」には、金銭だけでなく人脈、心なども含まれるが、この2つの理由がなければ続かない。

コミュニティ・ビジネスという考え方が最近出てきた。それは「共同体の課題、困っていることを、地域の人が営利目的ではなく、ビジネス手法で解決する」こと。意識は行動を変えないが、行動は意識を変える。

100人が一緒に1歩を踏み出すことは非常に難しい。でも、1人が1歩を踏み出すことはすぐに出来る。1人が少し走ってみて、何人かついてくるようであれば、そのまま走り続ければいい。誰もついてこなければ、戻ればいい。100人で踏み出したら、例え1歩でも戻るの難しい。

ただ、反対するから、否定的だからと言って、閉め出してはいけない。閉め出したとたん、100倍のエネルギーをもって足を引っ張りにかかる。

地域おこしは「モノづくり」から入ることが大事。「モノ」とは「資源」。地域には必ず資源がある。その地域にある資源を探すこと。「ヒト」も同じ。逆転の発想が必要。駄目なモノ、駄目なヒトを見つけたら「しめた！」と思え。それをどう逆手にとって、活かすか。

例えば、「松本一本ネギ」。今、ブランド品として人気を博しているが、一時は喪失の危機に瀕していた。その時、1人の女性が「私には大事にしたいことが3つある」と動き始めた。3つとは「松本一本ネギを地域の宝にしたい」「味を残したい」「仲間と一緒にやりたい」。今は、松本のホテルで、ネギのソテー1000円で供されている。モノにはヒトの気持ちが必要。ストーリーがあって初めて売れる。

地域を考えると大事なのは、モノづくり、ヒトづくり、場づくりの3つ。

我々が100言うより、1人を育てて地域に返すことが大事、と思って仕事をしている。



寄合渡の人達も聴講

(2) チームワーク (事前検討)

聞き書きに出かける前に、A~Dのチームに分かれて、各人が何を聞いてくるのか、方針を検討、確認した。

(3) 聞き書き

5班(プログラム p.8)に分かれて聞き書き学習を行った。午前1カ所、午後1カ所の計2カ所を回った。午後の訪問先では、訪問先の方と一緒に昼食を摂りながら聞き書きを行った。どのお宅でも、煮豆や漬け物などを出していただき、それをいただきながらの聞き書き学習となった。



聞き書きに出かける

(4) チームワーク (情報の共有と整理)

午後2時10分~2時30分の間に、各班が集合。班毎に聞き書き内容をざっと確認した後、

A～Dの各チームに分かれて、とりまとめに向けて情報の共有を行った。また、各チームとも、発表者、質疑応答担当者、発表用紙作成係など役割分担を決めたほか、全員がチームに貢献するように求められた。



情報を共有し、まとめる。



参加者が議論に余念がない頃、ハツラツ研のメンバーは裏方の仕事

(5) 講義 (名古屋大学大学院国際開発研究科 西川芳昭教授)

「開発＝develop」とは、中にあるものを引き出すという意味。

まちづくりの2タイプ；A) 主体がはっきりして責任の所在が明確、かつスピード感のある事業展開が可能な「この指止まれ方式」のまちづくりと、B) みんなで、ゆっくりと、ゆるやかな責任で、楽しみや満足を求めるタイプのまちづくり。それぞれの長所と短所を整理し、どちらか一方ではなく、それぞれの短所を補う形で発展できることを、湯布院・長浜のまちづくりを例に引いて説明。



西川教授

これまでの開発介入で謳われた「遅れた地域への近代的技術の導入」や「市場へのアクセス提供」とは異なる開発が可能ではないか。販売農業のために、生きるための農業が圧迫されるのでは本末転倒ではないか。

開発は、プロセスである。参加の仕方の変化（プロセス）を評価することが必要になっている。



(6) 交流会

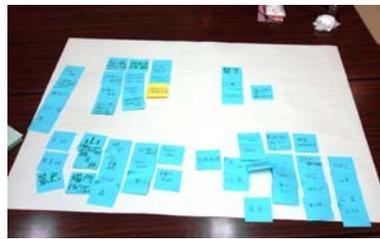
集合写真を撮影した後、集落の人々との交流会を実施した。まずは、聞き書き班毎に聞き書きに伺った人と交流し、聞き足りなかったことを補足したり、意見交換をしたりした。その後は、自由に席を移動し、交流を深め、情報を得た。うち解けた雰囲気の中、いろいろな話ができたとであった。集落の人も民謡を謡うなどして、参加者との交流を楽しんでいた。翌日の発表会にとって、地元側が発表を受け入れる素地となった。



(7) 提案作成

各班とも、午後 7 時半から作業を開始。模造紙を広げて、資源や課題などを整理した後、どのような提案が出来るか検討を重ねた。

午後 11 時 30 分には全グループが公会堂を出たが、場所を旅館に移して作業を続けた。各チーム、午前 2 時頃～3 時過ぎまで検討を重ねた。



3) 3月1日(日)

(1) 発表

朝 8 時前には全員が揃い、発表に向けてリハーサルを行い、発表内容を改善する作業を行った。

午前 9 時には、集落の人が集合。①Dチーム、②Cチーム、③Bチーム、④Aチームの順に発表を行った。各発表での質疑応答等は下記の通り。(各チームの発表用紙は後ろに添付)



リハーサル

① Dチーム

「ようこそ寄合渡へ」と題して、使われていない宿泊施設を活用した森林研修を行う(信州大学森林学科の間伐技術研修など)、寄合渡の山に桜を植樹し花見が出来るようにする、寄合渡の宣伝が不足しているから、花豆など寄合渡の美味しい食べ物を使って駅弁を作り、松本駅で販売する、「寄合渡ちゃん」というキャラクターを作る、などのアイデアが出された。

- ・ 山に桜を植えて花見の名勝地とする、というアイデアが良かった。折角山に囲まれているのだから、これを機会に花の綺麗な山にして、山の良さを分かってもらいたい。

Q 駅弁は誰が作るのか



A 花豆の会。あるいは、松本大学とコラボして、アイデアコンテストのようなことをしてもよい。学生を呼んで奈川を歩いてもらい、アイデアを出してもらったり、松本大学の調理部に調理してもらったりといろいろ考えられると思う。

② Cチーム

「学び舎プロジェクト」として、高齢者の持つ山や食に関わる技術を、集落の若い世代に伝えることの重要性を発表。また、集落の若い世代だけでなく、合わせて、都市の人々にもそれを楽しんでもらったり支援してもらったりとした。



- ・ 都市と農村の交流は、都市側の都合によってつまみぐいされる可能性がある。都市と農村の対等な関係が築かれるようにしたい。
- ・ 若い人、後継者がいない。5年後、10年後の自分の家庭を考えると不安。自分を看取る人もいない。若い人が生活していくためには、それなりの収入が必要。

国全体を見ても、山間地が過疎化している。行政は、採算が合わなければ手を引くけれど、地域を支えることも行政の大切な仕事であるはず。発表は、理想ばかり。とはいえ、若い人が理想や夢を持つことが大事だと思う。ハツラツ研究所も、自分は評価している。例え可能でなくても、何とかしよう、何とかしたいと努力する若い人がいることが、活性化につながると思っている。

③ Bチーム

「点から面へ」をテーマに、寄合渡の課題とたからものを挙げた後、それらを組み合わせることで何が可能か、また、外部者をスパイスに例えて、どんなことができるかを発表した。



- ・ 面白い発表だった。
- ・ 「面」というには不足しているか。点が点線になったくらいかと思う。
- ・ 掛けたり、足したり、という手法は新鮮だった。いかに就業機会を作るかが大切。
- ・ 素材の料理の仕方で、いいものが生まれるというアイデアだと理解した。

④ Aチーム



すぐに実現可能なこと、とのコンセプトで、寄合渡3分コース、3時間コース、どっぷりコースといった企画や、野菜の直売や道路沿いののぼりなど、人に寄ってもらい、立ち止まってもらうことを提案した。

- ・ (株)奈川山菜で野菜を一緒に置き、販売してもらいたいとずっと考えていた。「やってみなきゃならんと思います。がんばります。」

- ・ 寄合渡周辺のばば達が作る野菜の直売所などもいいのではと思う。
- ・ 現実的な案だが、もっと夢があってもいいのでは。できるところからやる、という事だと理解する。対象として一般の人を狙っているが、こんな田舎に来てもらうには、もっとマニアックな人を呼び込むことも考えて良いのではないか。
- ・ ちょっと寄ってみる、というのは良い発想だと思った。「歓迎」という文字があるだけでも印象が違う。
- ・ 今、駅前のマンションに住んでいるが、終日土に触れる機会がない。マンション住民をターゲットに、マンション運営委員会などに、奈川にはこんなメニューがある、と発信したら良いのではないか。

その他、発表全体に対して、集落の方々から下記のコメントがあった。

- ・ 何か活動を起こすためには、皆が同じ気持ちにならなければ出来ない。仕事を抱えながらだと、集まることも出来ない。
- ・ 私たちだけが騒いでいて、自分たちの思いが先輩方に伝わらない。26号線を車やバスが通っても、何もしなければ寄っていつてはくれないと思うが、協力が得られなければ難しい。
- ・ じじ、ばばが頑張れ、と言われても限度がある。若い人が付いてきてくれないと、いろいろなものが廃れていく。年寄りなりに頑張るが若い人も頑張ってくれないと発展はない。
- ・ 実行はなかなか難しいかもしれないが、一步一步近づくことが大事だと気づかされた。
- ・ 寄合渡元気ハツラツ研究所が、昨年から続いている。今日、自分もここに参加し、皆が将来を考えて良いことをやっていると感じた。この活動が浸透していけば、もっと、じじ、ばばも参加すると思う。
- ・ 来年もこの催しをする予定があるのか。



大勢の方が参加してくださった。

発表会の締めくくりとして、本事業の検討委員、講師に講評をいただいた。

(国安) 発表は、次世代への対策を検討したものであり、その熱意を買う。仕事が地元にあるということは勿論、市街地へ通いの仕事をしてでも地元に住みたいという思いも大事だと感じた。

(西川) 一昨日乗った市バスの中で、中学一年生が、学校で出された宿題について話をしていた。「奈川の将来をどうするか」という課題であるようで、地域の将来を真剣に考えていた。大人もその思いに答えていくべきだと強く感じて、今回の学習会に参加した。ハツラツ研究所の活動にとって、今回の行事が次の一歩になったかどうか。今回、いろいろなスパイスが入ったのではないか。

(白戸)

- * 発表や聞き書きで大事なこと。相手の顔（表情）を見ながら言うこと。元気のあるときに言うのか、しょんぼりしている時に言うのか。やる気のある時に言うのか、ない時に言うのか、その時々で言い方が違うはず。
- * 地域の良いところを見えなくしている事がないか。
- * 地域のことには、地域を越えた問題も影響する。一人一人が出来ることを、自分の足元でやっていくことも必要。

(2) 閉会式

JAICAF 芳田副会長、寄合度元気ハツラツ研究所菅原代表、奈川支所奥原課長の挨拶のあと、寄合渡町会、元気ハツラツ研究所のメンバーには芳田副会長から、参加者には菅原代表から修了証が授与された。

(3) 学習会振り返り

時間の制限があり、各人に一言ずつ学習会を振り返ってもらった。

- * これまで農山村を知らなかった。3日間の短期間であっても、これからの仕事に役立つと思う。今度は夏に再訪したい。
- * 山が花見の出来るようになることを期待。ゆっくりソバを食べながら、花見が出来る寄合渡にまた戻ってきたい。
- * 理論と現実のバランスを考えていきたい。
- * 散策での質問の少なさに驚き。もっと好奇心を持った方が良いと思う。もっと議論の時間が欲しかった。
- * 2時間ずつ2軒まわった聞き書きは疲れた。雪が見られて嬉しかった。
- * これまで何度か奈川を訪問してきたが、それは“農業”の切り口だった。今回の学習会で、一つの切り口では開発は出来ないことを実感した。
- * 地元に戻りたいが仕事をどうしようかと思悩んでいたが、今回の学習会は、自分の足元を見直す機会になった。小さな頃、おじいちゃん、おばあちゃんの言いつけから逃げ回っていたが、いろいろなことを学ぶ大きなチャンスだったのだと後悔した。
- * 初日は風景として寄合渡を見ていた。でも、昨日、聞き書きを行って、見方が変わった。
- * 初めて地域の人にお話を聞いた。とても楽しかった。自分がやりたいと思うことが、現実味を帯びてきた。地域の持っているもの、地域の人がほしいもの、求めているものを理解して、本当に必要なものを考えたい。
- * 自分の専門は家政だが、農業が出来れば、栄養バランスを考えて野菜を作るなど、もっと可能性が広がると感じた。
- * 皆さんと交流が出来楽しめた。ソバの花が咲いているときに再訪したい。ソバの収穫はどのようにするのか関心。ソバがブランド化されるといいと期待している。ソバ好きは少々遠くても食べに行く。もっとPRしてお客が来て、交流が出来ると良い。聞き書きの時間が足りなかった。時間がもっとあれば、もっと本音をひきだせたのではないか。わらじではなく、草履だったら1足作れたのではないか。
- * 人のつながりが強く、暖かいというのが“田舎”のイメージ。その通りのことを実感した

が、反面、それが制約になることも聞いた。全ての人と一緒にやっていくことが、いかに難しいか。発表にむけての作業に、1時間でも地元の人に入ってもらい、一緒に組み立てる作業ができればよかった。

- * 田畑が見たかった。
- * 今回のテーマは「参加型開発」だったが、寄合渡のために何が出来るか、というより、自分は何が出来るのかを考えさせられた学習会だった。経験者と一緒に勉強できたことが非常に良かった。
- * 他の参加者、助言係りから学ぶことが多かった。スケジュールはタイトすぎた。出来れば、民泊したかった。
- * もっと長い期間でも良かったと思うが、参加のしやすさと受け入れ側の負担を考えると、3日間が限度かと思う。聞き書き班と発表チームを分けたことは、悪くなかった。参加型「発展」について、これからも考えていきたい。
- * 学んだことは多かった。参加者からいろいろなアイデアが出てよかった。
- * 技術ではなく、自分の関わり方、立ち位置を再考できた。自分たちの発表について、地元の人と議論がしたかった。聞き書きでは、若い人の意見も聞きたかった。
- * ちらしの文言に飛びついた。期待が大きかったが、3日間ではこれが精一杯かと思う。本気で向き合うには、1週間程度の研修で、事前の情報ももっと豊富に、もっと咀嚼する必要がある。共同体について深く考えさせられた。
- * 留学生が刺激になった。もっと多く参加してもらえると良いと思った。散策は全体で動いたが、グループごとに動いたほうが、もっと深く聞けたのではないか。今回、参加の場は、全て JAICAF がお膳立てしてくれた。実際には、これを全部自分たちでしなければならぬのだ、と考えながら過ごした。
- * 村の人のために何かしてあげる、ではなく、村の人の中にもっと入りたい、もっと入ろうと感じた。

公会堂の片付けと町会総会のためのセッティング（午後 2 時から次期役員を選出が行われるとのこと）を行い、バスに乘車。寄合渡元気ハツラツ研究所の皆さん、支所の皆さんのほか、聞き書きでお世話になった皆さんも自宅から出て来て見送ってくださった。



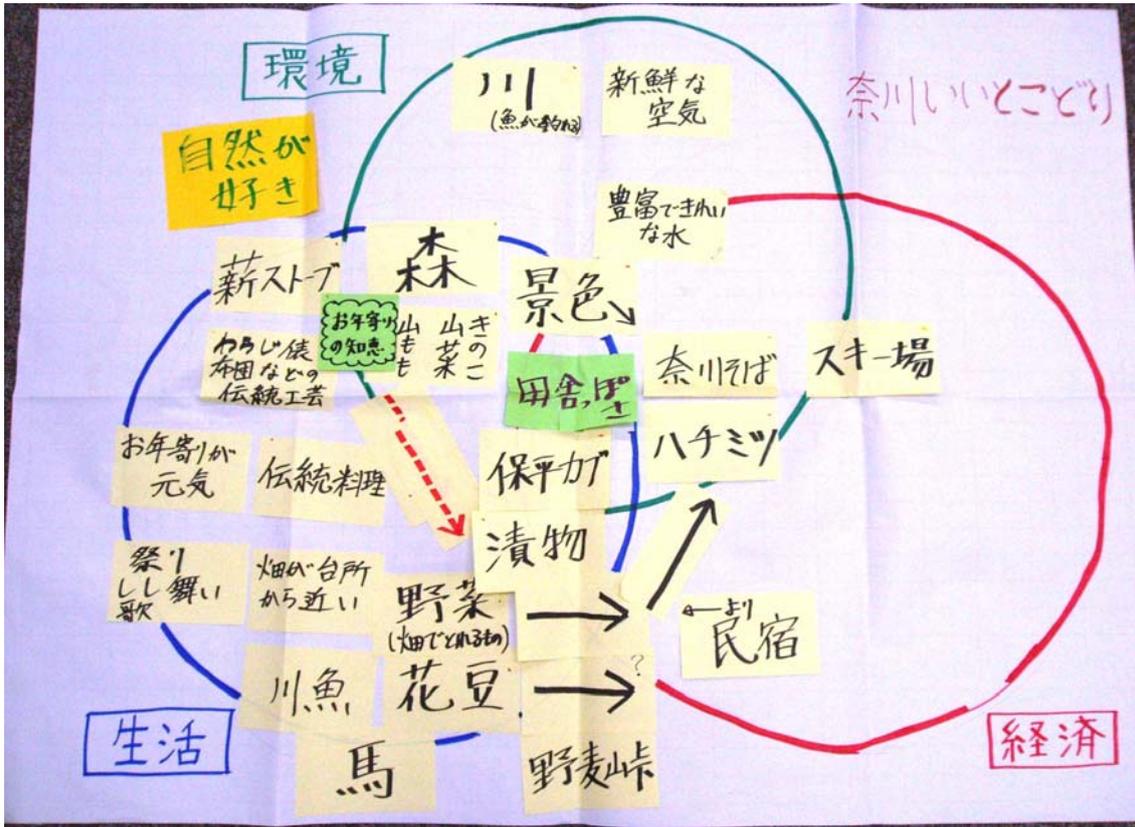
その後、奈川支所桜井主査より、①3月7日～8日に、寄合渡と湯河原町の交流会が行なわれ、寄合渡の皆さんが湯河原町を訪問、予想以上の歓待を受けて、今後も交流が続きそうであること、②「寄合渡桜の森計画」に着手すべく、集落内でも盛り上がりを見せていることについて連絡があったので紹介する。

（文責：JAICAF 西山）



(社)国際農林業協働協会JAICA/寄合渡元気ハツラツ研究所
第3回地球時代のヒント・農村未来塾
～聞き書きから学ぼう“参加型開発”と国際協力～
2009年2月27日～3月1日・長野県松本市奈川地区寄合渡

みんなでパチリ



すぐできる!!

PR方法

- のぼりをたてる
- 山菜の袋の裏面に「〇〇さんが作ってます!」写真入りでPR
- スキー場と山菜会社の連携
- 松本駅にマップを置く
- 地図にQRコードをつける

↓

- ♥ 26号線通行者の足をとめる。
- ♥ 寄合渡 いいところ再発見!

ちょっと寄ってく?

♥ 寄合渡 ♥

- ♥ 3分コース
のぼりをたてる
「トイレあります」
- ♥ 3時間コース
「無人販売所」
スタンプラリー
- ♥ 1泊コース
孫と一緒に〇〇体験
(農業・そば・わらじ・まきわ)
- ♥ ぶらりコース
民泊 民宿 + 生活体験

学び舎プロジェクト

宝 じいばば、支所の職員、ハツラツ研等
外部とのつながり(大学の先生等)、ゆくりした時間、祭
自然、きれいな景色、水、森、伝統料理

課題 冬にするのがない、後継者不足

あったらいいな-

- 人を活かせる場
- 一緒に奈川のことに考えてくれる外部の人
- 奈川の特産物を買ってくれる消費者
- 奈川に来てくれる観光客
- 次の世代に知恵、技を伝える場

↓

地元の宝を活かし
内外の人に寄合渡の豊かさを伝え
人間の本能をよびもどさせる。

提案書 学び舎プロジェクト

時期: 冬
コース: じい組 - 春木切り出し体験
座学 - 森を支える私達の暮らし

目標: 外の人や村の若い人に山の大切さを知ってもらう
薪を切り出す技術と身につけてもらう
春木作業を手伝ってもらう(労働奉仕)

講師: じい組、ハツラツ研、支所のひとたち
対象: 地元 - 中学生、外に出た若い世代
外の人、学生

サポーター: 小澤君たち

コース: ばば組 - ばばの知恵に学ぶ・食育
漬物体験(赤かぶ、そばがら、らっきょう) 味噌、そば、もち、山桃、ドライ野菜、伝統料理
袖無し半てん

講師: ばばたち、ハツラツ研、支所のひとたち
対象: 地元 - 小中学生、外に出た若い世代
外の人

目標: 寄合渡の伝統食文化・暮らしを知ってもらう
手でものを作るおもしろさ、手づくりのものを食べる喜びを
"ばばの技・知恵を生かす"

時季: 夏
コース: 夏の隠れ部屋
→ 冷涼な静かさは 学びの空間を得る

目標: 奈川の自然を清く爽やかに伝える
→ 奈川のファンが増える
旅館、花豆の会のリユースになる

対象: いやしな空間を必要とする人
(物書き、学生、社会人など)

滞在先: 旅館、下宿受け入れ可能な家
食事: 旅館、花豆の会の仕出し

これまで: 親世代 → 次世代

これから: 親世代 → 次世代 → 次世代 (外の人への働きかけ)

学び舎プロジェクト

学び舎プロジェクト				
じい組	ばば組	隠れ部屋		
交流	継承	活性化	収入向上	知名度↑

寄合渡が長く元気でいられる

背景・問題意識

アピールポイント

- ・ 1日の気温差が大きい
- ・ 食物がおいしくて豊か
 - ・ 漬物(保平かぶ、山菜、きのこ)
 - ・ 奈川のとうじそば・そば粉
 - ・ 平筍(根まがり筍)
- ・ 山柑
- ・ 乳製品(牛乳、チーズ、ヨーグルト)
- ・ はろみつ(日本蜂)
- ・ 自然が豊か
 - ・ おいしい湧き水
 - ・ チョウが50種くらいいる!
- ・ 伝説的イ本験(わらじ作り、獅子舞)

弱点

- ・ 労働力不足(若者が少ない)
- ・ 農業だけでは食べていけない
- ・ そば粉・あさびの生産が少ない
- ・ 地酒がない(なんかさみしい...)
- ・ 日本蜂蜜の需要 > 供給
- ・ 入山規制ができてない
- ・ まき(春木)よりは重労働
- ・ 農業を始める人を受け入れる体制がない
- ・ 観光PR・観光の受け入れ体制が不十分
- ・ 交通が不便
- ・ 郵便局がない(金融機関がない)

